

■特集■晴の歌を考える 〈中世の晴の歌〉

京極殿と「晴の歌」

平田英夫

— 〈極じく気高く神さびたる音〉をめぐって —

『伊勢物語』（第八十二段）は、惟喬親王一行が、渚の院にて桜狩の宴を催す場面を描く物語としてよく知られる。桜の木の下で酒を飲み、その枝を手折りて髪飾りにして、やまと歌を詠んで宴をなす。権力からは疎外された惟喬親王の私的グループではあるが、晴の場が演出され、君臣和楽の風景が優雅に描かれる。儀式的でもなく、それ故に仰々しくもないが、日本の古典作品における理想的な「晴」の原風景の一つであろう。君主と臣下、そして酒宴に芸能、和歌といった諸要素に加えて、ここでは桜の木の下という特別な空間が「晴」の場として相応しい状況をつくっていよう。本稿においては、このような日本における理想的な晴の風景を確認したうえで、やはり桜にまつわる、鬼神に愛でられたという、やや特殊な歌を取り上げることで、晴の歌が持つ性質や問題の一端を考えてみたい。

『今昔物語集』巻二十七第二十八話「京極殿にして古歌を詠むる音有る語」では、

藤原摂関家の栄花と権力を象徴する場である京極殿（土御門殿）にて、藤原彰子が、桜が咲き乱れる春の真昼間に、古歌を詠じる不可思議な声を耳にして怖れたという話が載る。本話は、同じく院政期の歌論書『俊頼髓脳』にも類話があり、和歌と、ものの霊にまつわる説話として知られていた。彰子とその声を耳にした状況は、今昔によれば、

三月の二十日余の比、花の盛にて、南面の桜艶ず栄き乱れたりけるに、院、寝殿にて聞かせ給ひければ、南面の日隠の間の程に、極じく気高く神さびたる音を以て、

こぼれてにほふ花さくらかな
というもので、彰子（本話では上東門院と称されている）は、「此は何に。鬼神などの云ひける事か」と怖れる。今昔の編者も「…物の霊などは夜にこそ現する事にて有れ、真日中に音を挙げて長めけむ、実に怖るべき事なりかし」と評す。不可思議な声

によって詠じられた和歌は、『寛平御時后宮歌合』、『新撰万葉集上巻』（菅家万葉集）にまで遡る、八〇〇年代後期に詠まれた古歌「浅みどり野辺の霞はつつめどもほれて匂ふはな桜かな」の下旬から転出したもので、『拾遺抄』や『拾遺集』にも入る当時としても著名な作品であり、院政期には、藤原基俊の『新撰朗詠集』にも見え、声に出して朗詠しやすい歌でもあった。

本話が問題としているのは、このような古歌が詠じられた場や状況であり、それは、えも言わず桜の花が咲き乱れる真昼に、寝殿の南面に庭に向かって開かれる日隠しの間に聞こえた「極じく気高く神さびたる」声であった。当時、道長亡き後、京極殿の主であったであろう彰子は、とてつもない怖れを抱き、二度とその場に近づくことができなかつたとされる。言うまでもなく、彰子は、藤原道長の長女であり、一条天皇中宮となり、京極殿にて、敦成親王（後の後一条天皇）と敦良親王（後の後朱雀天皇）